

※ ホームページ等で公表します。(様式 1)

立教 S F R - 院 生 - 報 告

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	合 崎 京 子 印	
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	小 山 亘 印	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同 の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	自閉症スペクトラムをもつ人のコミュニケーション ー初対面場面における会話分析を通してー		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	合 崎 京 子	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 200000 円／ (採択金額) 200000 円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、自閉症スペクトラム者のコミュニケーションについて、当事者の会話の分析により、その様相の一部を明らかにするものである。データに会話のトランスクリプトと会話参加者の回顧インタビューを用い、そこで生じた両者の同一場面に対する解釈の齟齬について、フレーム、フッティングといった概念を援用した分析を行った。その解釈の相違がどのような事象に起因したのかを考察した結果、彼らの言語運用は認知特性のみではなく、その社会的背景、会話の状況に強く依存することが示された。以上を通し、認知科学的研究が主流である自閉症スペクトラム者のコミュニケーションの解明に対して、社会言語学が果たす役割の可能性を示唆した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[自閉症スペクトラム] [談話分析] [語用論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1) はじめに

本研究は、他者の心的状態の類推が適切に行えず、社会的認知に障害があると言われていた自閉症スペクトラムを持つ人と、その症状がなく診断を受けていない人、すなわち定型発達者の二者間会話、及び会話参与者に対するフォローアップインタビューの分析を通し、自閉症スペクトラムを持つ人のコミュニケーションの実態を捉えようとするものである。会話の中の言語・非言語行動を詳細に描写し、参与者が会話にどのような前提を持ち、立ち位置を展開していくか分析を行う。特に、双方の前提が異なった時どのようにそれを乗り越えて協調していくかという、相互行為の過程を明らかにすることを目的とする。

2) 研究方法

本研究で扱う会話は、自閉症スペクトラムを持つ成人女性の A と、定型発達成人女性 B の、15 分間の初対面会話である。この会話の中で A の発言や質問の仕方を起因として、参与者相互のフレーム解釈に齟齬が生じており、会話後の回顧インタビューでも解釈に食い違いが見られた場面について分析を行う。また、この箇所の言語・非言語行動を、西阪ら(2008)が日本語用に整理した表記法を参照し作成したトランスクリプトと、会話参与者のフォローアップインタビューコメントをデータとした。以上の 2 種類のデータについて相互行為の談話分析を試みる。分析の概念装置としては、人々がその場の状況、行為、対話者に関する知識の構造を用い、進行している相互行為を解釈する枠組みである「フレーム」(Goffman, 1974)、及び、そこで行われている相互行為に対して投射する自分の立ち位置のことである「フッティング」(Goffman, 1981)を用いた。

3) 分析

事例分析として取り上げる場面は、データの会話開始から 3 分経過した箇所で、参与者が互いに社会人経験について述べ合った後、自閉症スペクトラムを持ち現在休職中の A が、定型発達者である B に、その職業や勤続年数について尋ね、A が返答を行っているところである。この箇所の直前では、会話が進むに従って二人の会話フレームが、よりリラックスした、日常会話的なものに転換していく様子が確認されている。

会話のトランスクリプト

01. B: °としが出ちゃいます°けど hh ((A を見る))=
 02. A: =(伏し目がちに)>いやいややく、大丈夫です
 03. : (1.6) ((この間 A は 2 回頭を縦に振る))
 04. A: そう、わたしあまりこう(.)長く働くというのが((首を横に振る))、なか((首を横に振る))なか
 05. : でき-でき-((首を横に振る))できていなので((ちらっと B を見る))
 06. : やっぱりそう((頭縦振り)) 続け↑るっていうのは素晴らしいことだと((頭縦振り))え: 思います
 07. : (1.0) ((A, お辞儀をする))
 08. B: ありがとうございます ((B, お辞儀をする))
 <LL 09-18 中略>
 19. A: ↑ あはい[うん
 20. B: [こうかわるじゃないですか
 21. A: はい((うなずき))
 22. B: フロント
 23. A: うん((うなずき))
 24. B: わたしも営業行ったり
 25. A: うん
 26. B: だからずっと((A を見る)) [あんまり仕事=
 27. A: [↑ あ:::
 28. B: =してるわけ[じゃないんで、
 29. A: [↑ あ::: ((この間うなずき))
 30. B: 比較的なんというかバラエティに富んで[というか、
 31. A: [↓ お::: ((うなずき))
 32. B: [(….)かもしれない(.)((笑い))
 33. A: [なるほど((うなずき))<ちょっとお伺いして、↑いいでしょうか？
 34. B: あ、((B は姿勢を正す)) いいですよ、
 35. A: ホテルの営業っていうのはどういう(.)ことするんでしょう、なんか
 36. B: ホテルの営業？=
 37. A: =そうですなんかた、とえばなにかうるとか
 38. (0.3)
 39. A: だとなんか想像、
 40. B: ものじゃないからね hhh
 41. A: [そう、
 42. 想像がしづらいんでしょ[と、おうかがいできればなと
 43. B: [え::: っとね:
 44. (0.3)
 45. B: え::: っと: ままず一番は:
 46. A: はい
 47. B: 客室があるじゃないですか
 48. A: あ、ありますね、はい

研究成果の概要 つづき

フォローアップインタビューのコメントも参照しつつ、本研究で着目した齟齬（突飛な A の質問に起因する相互行為）をめぐるフレームやフットィングの形成、変化、相互理解がどのように会話を協調的結末へと導いたのかについて分析・考察を行った。A はインタビューの中で、会話中に起きる沈黙並びに、他人への質問に対する恐怖心が幼児期の経験に起因する理由により、非常に強いことを語っている。しかし本会話においては、今回分析を行った箇所直前まで、A も質問をできるようなリラックスした会話フレームへの転換がなされている。さらに、LL.11-32 の B の語りの中では、A の会話に対する警戒心や恐怖心は、そのあいづちにも示されるとおり徐々に後景化し、会話の内容自体を楽しむ余裕ができていたことも併せて示されている。以上の事象により、A の、B の職種内容についてより深く知りたいという気持ちの先走りから、L.33 に見られるような突然の A の質問がなされた可能性がここでは推察される。その様子からは、A が、B のフットィングを、自分の知らないことを教えてくれる存在であると位置づけていること、またこの場のフレームを、一種のレクチャーの場としてのフレームで捉えている可能性が示唆された。しかしながら他方の B は、A のそのフレームを共有するには少なすぎる情報しか A から与えられていなかったため、A の質問の仕方や内容が脈絡や論理性が欠如しているように感じられ、違和感を覚えるに至ったと解釈することもできる。しかし、この箇所で A は、B の感じた違和感に何も対処しなかったわけではない。A は、B の助け舟的な発話の力も借りて、相手つまり B のフットィングを捉え直していた。そして自分の質問者としてのフットィングを、よりわかりやすい形で B に再提示し、その結果、今度は「質問-回答」というフレームを二人で協働して立ち上げるに至ったことが重要な点である。

以上を通し、コミュニケーションの遂行にあたっては、参与者の一方の行った行為が、対話者に適切でないと受け止められるものであった時に、1) そのような判断をした対話者側も、適切でない行為を行った相手が、どのようなフレームやフットィングのもとで話しているのかに思いをめぐらせ、それに合わせた修正案の提示が可能であるか考えることが肝要であること、そして 2) その提示の有無が、その後の会話の流れを大きく左右することが、A の唐突な質問に対しての、B の助け舟的な発話によってもたらされたその後の二人の会話の協調からも示唆される。

4) まとめ

本研究では、自閉症スペクトラムを持つ人と、それを持たない人の初対面会話を事例として取り上げ、談話分析を行った。その中では、症状のあるなしに関わらず、両者とも移り変わる会話のコンテクストに反応し、常にその態度を変化させていること、すなわち、ときに対話者が適切であると判断する行為を、またときにそうでない行為をそれぞれの場面に応じ行っているということが明らかとなった。今後は分析事例数を増やすことによって、社会文化的コンテクストが自閉症スペクトラムを持つ人のフレーム、フットィング形成に及ぼす影響のより詳細な分析を目指すとともに、談話分析の手法を用いた会話の分析が自閉症スペクトラムを持つ人のコミュニケーション齟齬を解明するのにも有効であることを示し、こうした分野での研究促進の一助としたい。

<参考文献>

- Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. New York: Harper & Row.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 「特集『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」『社会言語科学』第 10 巻，第 2 号，13-15 頁．社会言語科学会．

を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

※ ホームページ等で公表します。（様式 3）

立教 S F R－院生－報告

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
- ④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

- ① 合崎京子(2015)「自閉症スペクトラムを持つ人の相互行為における調和・不調和：初対面会話と回顧インタビューを通して」立教大学異文化コミュニケーション研究科（修士論文）
- ④ 合崎京子(2014)「発達障害者による会話フレームの構築と共有－当事者会における初対面会話の談話分析を通して」2014年3月19日「言語と人間」研究会第39回春期セミナー（ポスター発表）『第39回 HLC 春期セミナー・ハンドブック』p. 25
- ④ 合崎京子(2014)「自閉症スペクトラム障害者の会話における協調行為－初対面会話における応答・あいづち/非言語行動を通して－」2014年5月31日立教・異文化コミュニケーション学会第11回大会（ポスター発表）『第11回大会予稿集』pp. 19-22
- ④ 合崎京子(2015)「自閉症スペクトラムを持つ人との会話の協調－初対面会話のフレーム分析を通して－」2015年3月15日第35回社会言語科学会研究大会『第35回社会言語科学会研究大会予稿集』pp. 144-147
- ④ 合崎京子(2015)「自閉症スペクトラム者の会話の解釈にコンテクストが及ぼす影響－談話分析とフォローアップインタビューを通して－」2015年3月21日 JACET 談話行動研究会（口頭発表）